
銀髪の魔術師

クロカラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀髪の魔術師

【Nコード】

N9234E

【作者名】

クロカラス

【あらすじ】

最強の魔術師と魔女の子供の物語銀髪赤眼の魔術師疾斗が親とはなれて成長していく

プロローグ

この世界は魔術と呼ばれる力が存在している

この世界はいろいろな種族が住んでいる

この世界はあらゆる力で成り立っている

この世界の人々は古来から魔術と世界に満ちている力を使い生活に役立ててきた

あらゆる魔術を使いこなし莫大な魔力を体内に宿し魔族を従えた魔術師がいた

あらゆる物を知り尽くした魔女であり絶世の美女がいた

二人は出会い恋に落ちた

二人は今もどこかで静かに暮らしているとき・・・

この話はこの世界でもっとも有名なお話

実在した話らしく教科書にも載っている

魔術師の名前は エイブラハム・オズワルド・黒羽根

クロバネ

魔女の名前は グランネース・ネイサン・ド・ブリジット

魔術師の方はどこかの島国特有の姓を持った人の血を引いているら

しい

そして、今もまだ秘術を用いて夫婦は生きている

ちなみにさっきの話には続きがあり子供がいたらしい

二人は、自分たちの才能を受け継いでいることを大いに喜びありとあらゆる魔術、武術を教え込んだ。

子供は小さいころから魔術教育を受け二人をしのぐ魔力を持ち力を得た

子供の名前は

疾斗・オズワルド・黒羽根

莫大な力を持った主人公の名前・・・

父が与えし試練

ここは、世界のあるところにある城

そこには今まで3人と無数の魔族が住んでいた。

今日は疾斗の誕生パーティーが開かれていた。

今日は伯爵階級以上の魔族と連合諸国の要人しか入れない

「疾斗、何でも言って見なさい。かなえてあげるから」
いまだに20代の外見を保った両親

俺は、今まで夢に見ていた願いをいつてみた

「俺は学校に行きたい！」

そう、これが僕の唯一の願いだった。

「疾斗？何を言ってるの？あなたは・・・」

「グランネース、理由を聞こうじゃないか」
周りが静かになった

「俺、今までいろんな人に囲まれて楽しかったけど友達は居なかった」

友達は、魔族の子供たちで楽しくないわけじゃなかった。

でも、人間の友達も欲しかった。

「・・・分かった、手配しよう」

「あなたっ！？なにを・・・」

「グランネース、疾斗も16だ。自分のことは自分で決められるだ

ろう」

いいぞ我が父！

「では皆の者！我が息子の新たなる旅に乾杯！」

「乾杯！！」

1人不満そうな我が母・・・

パーティーも終わりが近づいたころ声をかけられた

「おめでとうございます。疾斗様」

この人は フレイアⅡクルラリア公爵

俺のよき理解者ってやつかな

「ありがとうございます。公爵もお元気そうで何よりです」

挨拶もそこそこに公爵は帰っていった。

程なくしてパーティーも終わった。

後日、俺は父に呼び出された。

「疾斗、人間界も危険はある。そこでお前に試験を与える」

父の話をまとめるとこうだ。

魔術師に治められるのが不満な魔族たちの動きが最近また活発になって人里を荒らしているらしい。

その親玉を倒したら無事学校に行かせてくれるのだという。

そうしないと、母が納得しないらしい・・・

「まあお、前にとってはそれほど強い相手ではないだろうが、油断はするなよ」

確かに魔物退治は何度も行かされたけど大群はちょっと・・・

「じゃあ、行って来い」

そういつて父は俺に転移魔法をかけた

「オッ、いるね♪」

ドラゴン、サイクロプス、ゴブリンその他諸々
まず、ドラゴンは一撃じゃ倒せないとして・・・

さてさて、何使いますかね？

手の中に魔力の球体を・・・重力を加えて
できました♪

『ブラックホール』

これを大きくしていつて・・・ホイ
どんどん吸い込まれていつてますなあゝ

ブラックホールが消えた

残ったのは・・・ドラゴン種、ヒドラ、巨人が数体

魔力を刃に変えて

『エアーカッター』

ドラゴンと巨人は良いとして・・・問題はヒドラ
コイツは再生するからなゝ

呪文^{スペル}魔術を使うか

『七賢者に申し上げる。古の契約と制約に基づき我に力を貸し与え
たまえ』

魔力と大気の力を食らいて敵を燃やし尽くせ』

『死者への鎮魂歌』

「終わったかな？では戻りますか」

戻った城で

よくやったとか、助かったと言われた。

1番嬉しかったのは母が入学を認めてくれたことだった。

出発前日

俺は公爵、伯爵クラスの悪魔^{デーモン}と契約した。

これは何かあった時のために、という父の条件だったからだ。

俺が通うことになったのは、スウェリア魔術学院というところだった。

こうして、俺は学校に通う事ができた。

都会は恐ろしい（前書き）

ヒロイン登場って感じです。

都会は恐ろしい

出発の日

魔法学院では自分の家の家紋を入れたマントを一着用意せねばならないらしく俺は黒羽根の紋章を背に刻まれたマントを着用して城をでた。

「グランネース、あの子はきっと成長して帰ってくるさ」
エイブラハム魔術師は、息子を心配する母にそう声をかけた。

そんなことが話されてるとも知らず俺は駅という建物にいた。
魔族圏の地域から出るのは初めてのことで見るもの全てが新鮮だった。

行き交う人間、無数の建物・・・

電車という乗り物は、本で見たら分かる。

きつぷというものを買って乗るもの、と書かれていた。

幸い、金はたくさんあった。

が、買い方は皆無

仕方なく、かかりいんという人に聞くと丁寧に教えてくれた。

人間で優しいんだな・・・と感動する疾斗少年だった。

電車という乗りものは、遅かった。

というよりも疾斗のほうが早いのだが・・・

それに、周りの人の目が俺に向けられている。

珍しいのだろうか？

確かに銀髪赤眼ぎんぱつせきがんというのは、周りを見回しても自分だけ

俺、都会でやってけるのかな？
くじけそうになる。

疾斗が不安に駆られてる中電車が止まった。

「えーと、確か迎えが来てくれるといわれたんだけど・・・」

1人暮らしは危ないからと両親の知人の家にお世話になることになってただけど・・・
早かったかな？

確か、待ち合わせは2時半

現在1時45分

まだ結構時間あるな

（とはいっても、うろついて迷子になるのはいやだしな）

仕方ないので、待ち行く人々の観察をしてみる

いかにも魔術師風の男、母と子供、獣人、男たちに囲まれている女の子・・・ん？

「ちょっと、やめてよ」

「いいじゃんいいじゃん俺等と一緒に遊ぼうよ」

（あれは何してるのだろう？）

疾斗は、人とあまり会わない生活をしていたためこういうことには疎かった。

しばらく見ていると男たちが疾斗の視線に気づいたのか

「お前、何見てんだよ？」

疾斗は、なぜ自分が怒られているのかわからなかった。

だから

「い、いえ見てないです」
挙動不審な返答しかできなかった。

あつという間に男たちに囲まれた疾斗は泣きたくなった。
(都会は恐ろしいなあ)

「ざけんじゃねえよ！」
殴られた。

「ぐふっ・・・」

「きもいんだよ」
囲まれて殴られ蹴られた。

「もうやめてッ！！私がついていきますから」

「おっいいじゃん。行こうぜお前ら」
だが、ここで彼らは謝っとくべきだった。

「ちょっと待て」
静かだが良く響く声

「あ？まだ殴られてえーの？」

すでに疾斗の周りの魔力が火花を出してる

ボキッと音を立てて大男が吹っ飛んだ。

次に魔力を大砲のように打ち出して3人に打ち下ろした。
小さいクレーターができた。

最後の人たちは魔力を込めたアッパー
何メートルかとんだあとグシャッと落ちてきた。

全員ピクピクツと動いてたのでまだ生きてると思う
だが、怒りは収まらない。

上級魔術のひとつでも使ってすっきりしたかったが町だったため
はばかれた。

仕方がなく死にそうなのつには回復呪文^{スベル}魔術をかけてやった

「あのっ、疾斗君ですか？」

さっき助けた女の子が声をかけた。

声をかけられたのにも驚いたが・・・

「何で名前を？」

「はじめまして、鳥越^{とりこし}ローラン・ローウェルン・彩芽^{あやめ}です」

誰？ 都会では、名前を当てるのがはやってるのかな？

「えーと、どちら様でしょうか？」

「あーもうっ、あなたの下宿先の娘！！」

なるほど、気丈な子だ。

「はじめまして、黒羽根^{クロバネ}・オズワルド・疾斗^{ハヤト}です」

一応名乗っとく

「さっきはアリガト・・・」

そういつて鳥越さんとやらは俺の手を取って歩き出した。

歩くこと15分程度

その間

その髪かっこいいねーとか強いねとか、鳥越さんが話してた。

「じゃーん、ここがあなたの下宿先でーす」

そこで僕が見たのは・
・
・

鳥越家

僕の目の前には小さな家が
隣の少女は

「ねっ、大きいでしょー」

イタイ・・・これで大きいって？よほど貧乏なのだろうか？

「さっ、入って」

鳥越さんの笑顔がまぶしい

貧乏なのにその笑顔・・・泣ける

家に入ると玄関で美人な方が出迎えてくれた。

「いらっしやい。疾斗君」

背中に羽、背中に尻尾
サキユバス
夢魔か

「ただいま、お母さん」

お母さん？ということは鳥越さんサキユバスも夢魔かな？

「どうもー 鳥越とりこし・ライムサキユバスウエル・ローラン・ウエルクスよ」
それからお察しのとおり夢魔よ、と付け加えた。

「ライムって呼んでね？」

ううむ、とても子供がいるとは思えない。

「お城より小さいと思うけど他の家より大きいと思うわよ？この家」
俺の考えを見通したみたいに答えた。

「お城？なんで？」

しばらく、ライムさんによる説明

「ふえー、あのエイブラハムとグランネースの子供！」
(そこまで驚かなくても)

「さあ、お茶にしましょうか」

紅茶は、とてもおいしかった。

あっという間に、時間が過ぎていった。

話題は先ほどの意味の分からない絡み男たちの話へ

「んでね、んでね。あっという間にバーンってやつつけちゃったんだよ」

「あらー、すごいわねー」

他にもあと3人ほど下宿しているとか、学校は同じスウェーリア魔法学院だとか

お茶が、終わった時に部屋へ案内された。

「おおー、荷物が届いてる」

「あたしの部屋は向かいの部屋だから、お母さんの部屋は突き当たり」

あとは、下宿人の部屋とからしい

一人部屋の戻って荷を解く

家から持っていたものは、魔術具、衣類、勉強道具などだ。

片付け終わるころには7時になっていた。

「疾斗ー！晩御飯だよー」

多分、鳥越さんであろう。

早速、君くんがなくなったなあーと思いつつ、テーブルへと向かった。

降りていくと、赤い髪の女の人が居た。

耳の形からしてエルフだと思う。
たぶん下宿している人だろう。

「はじめまして、黒羽根・オズワルド・疾斗くろばねです」
一応挨拶しておく

「は、はじめまして、クリシス・バトネック・アルフェルタです。
エルフです」
ビンゴ!! やはりエルフでしたか

「ここに住むことになりました。よろしくお願いします。疾斗と呼
んでください」
丁寧に頭を下げる。

「は、はい。よろしくお願いします。アルフェルタって呼んでくだ
さい」

そのまま、アルフェルタさんと別れいいにおいのするほうへ
2人、知らない人がいた。

一人は耳からして狼男ウエアウルフの男の子、黒髪

もう一人は金髪、ヒューマンか？

「黒羽根・オズワルド・疾斗クロバネです。よろしくお願いします」
挨拶を忘れない俺

狼男ウエアウルフの子が

「僕は、ダグナール・D・フェイヘル。フェイヘルと呼んでくださ
い。よろしく。」

金髪の女の子が

「私はライカーク・レネペオル・エスク。吸血鬼^{ヴァンパイア}の真祖だ。エスクと呼べ」

真祖？

真祖って最強種の真祖？

この家に普通のヒューマンはいないな

「お前の血はうまさうだ。今晚、貰いにいくかも知れんぞ？」
うおおい！狙われてません？僕、狙われてますよね？

「フフ、何、味見だ。献血程度に貰おう」
怖っ！！

「何言ってるのエスク。いつも断って吸ってるくせに」

「う、うるさい。ばか者。」

程なくして夕食

「さあ、今日は疾斗君のウェルカム・ディナーよ。召し上がれ」
夕食はとてもおいしかった。

夕食後、風呂に入り、もう寝るか？という時にライムさんが来て
「疾斗君、家の彩芽^{あやめ}ちゃんに襲われないようにしなさいよ♪」
といったのが気になった。覚醒前でしょう

ベッドに横になった時、コンコンとノックされた。
あけてみると、エスクさんだった。

「どうしたんです？エスクさん」

「さんはいらん。血を貰いにきた」
血、というと赤い血液
冗談じゃなかったのか

「えーと、どうやって飲むの？」

「首筋から貰う。大丈夫だ。死にはしないし抵抗^{レジスト}できるのだろう？」
ホントに吸う気だ。この人

それからわずかばかりの『献血』をしてふらふらになった。
最後にエスクさんが

「思いのほかうまくいったぞ。また貰いに来るからな・・・」
といった気がした。

とりあえず、俺の意識はブラックアウトした。

錬金術至高の秘薬

朝、小鳥の鳴く声で俺は起きた。

時計は、7時30分を示している。

俺は着替え、下へ降りた。

下に下りるとライムさんとアルフェルタさん朝食を作っていた。

「あらゝ早いわね。彩芽ちゃんなんかまだ寝てるわよ」

「いえ、ちよつと出かけようかと思ひまして・・・」

今日は、この町サジリアへ探検がてら買い物に行こうと思ってるのだ。

明日は、スウェリア魔法学院の入学式

魔術薬や魔霊石まれいせきなども欲しい。

魔霊石というのは、この世界にある石でちよつと魔力を持ったもの

ならばすぐに見分けることができるほど手に入れられる石だ。

これより希少な精霊石、神霊石などはなかなか見つからない。

魔霊石は『錬金れんきん』などで加工するために使用される。

疾斗は、魔霊石を使い『錬金』するのが好きだった

小さいころは『錬金』でいろんな物を作って遊んだ。

「首のところどうされたんですか？」

「は？首？」

見るとなるほど、2つ穴が開いて赤くなっていた。

（全く、治療くらいしてくれてもよさそうじゃないか）

吸血鬼の真祖なら魔力もあるだろうに・・・

すぐに自分の治癒呪文スベル魔術で直した。

朝食もすばらしかった。

パンにスープ、サラダにパイ

どれも実家のように豪華ではないがこの上も無くおいしかった。

さすが、ライムさんとアルフェルタさんが作っただけの事はある。

疾斗が、食べ終わるころ彩芽さんとエスクさん、フェイヘルが下りてきた。

「おはよう、早いね」

3人もテーブルにつく

「エスクちゃん、今日もいつもの？」
いつもの？

「ああ、頼む」

そういつてライムさんが取り出したのは・・・ハ？

トマトジュース？そんなベタな・・・

コップいっぱいに注がれたトマトジュースを一気に飲み干し

「じゃあな」といつて消えてしまった。

真祖がトマトジュースって・・・

「じゃあ、ちよつと出かけてきますね」

そういつて食堂を出ようとした俺を

「ちよつと、どこいくの？」

彩芽さんが引きとめた。

「ちよつと買い物とか魔霊石採りとか」

「あたしも行く！」

「いや、いいよ。きても退屈するだろうし」

断ろうとしたら

「いいから行くの！」

そういつて彩芽さんは、急いで朝食を食べ終えて俺に

「5分待って！」といつてドタドタとあわただしく2階へ行った。

残ったフェイヘルはニヤニヤしながら

「いいですね〜若い者同士楽しんできてください」

といったので、小さな魔力の塊を作つて投げといた。

再びドタドタとあわただしく戻つてきた彩芽さんは、普通の町に
い
そんな感じの子になっていた。

「さあ、行こう！」

（別にたいしたことするんじゃないんだけどな）
とりあえず、従う事にした。

最初に魔術用品がそろうという魔術用品専門店にきた。

確かに魔術用品から本まで多種多彩だ。

「オジサン、こんにちは〜」

こここの店員さんとは顔なじみらしい。

あれはグレンデルだ

「オウ、彩芽ちゃんじゃないかい、隣にいるのは彼氏かい？」

「違うよ〜。うちの新しい下宿人」

「そうかい。俺は、こここの店長 クロス・ホーマーってもんだ」

そういつてホーマーさんはガッハッハと笑つた。

豪快な人だ・・・

「はじめまして、黒羽根・オズワルド・疾斗クロバネです」
「オウ、疾斗だな！よろしくな」

「黒羽根・オズワルドといやあ有名人だが、親戚かい？」
「息子です」

「……」
「ホーマーさん？」

「申し訳ありやせん！！俺としたことが黒羽根様の息子さんになれなれしい口を！」

「いやいや、いいですよ。俺のことは疾斗って呼んでください」

「そんな恐れ多い」
それからホーマーさんとなんとか話をつけ魔術道具を買い外に出ると1時間たっていた。

「そんなにすごいのか？疾斗の親って？」

「魔族たちに対してはね……」

「ふうん、あたしも半分魔族の血が流れてるんだけど」

「ここ、勢力圏外なんじゃないのか？彩芽さん、夢魔サキユバスのハーフ？」

魔霊石の拾えるところに案内してもらいながら聞いてみた。

「そだよサキユバス夢魔とヒューマンのハーフ。それからさん付けやメテ」

「了解。彩芽、角とかないけど覚醒してないのか？」

「してな〜い」

サキユバス・インキュバス
夢魔というものは、7〜10歳位で性別が分かる。
名前も、性別が分かってからつけることが多いらしい。

それから、好きな人と両思いになれば覚醒して羽・尻尾などが生えてくるものらしい。

精を吸って生きるので普通の魔物よりはるかに長く生きれる。

「ここだよ」

そこは少し開けた場所で近くに少し木が生えていた。

では、

『古来より力を秘められし石よ。私の召喚に応え我が前に集まりたまえ』

この呪文で集まるのは、力のこもった魔霊石とかうまくいけば精霊石、神霊石とかだ。

力の小さい魔霊石は、また次回

おっ、どんどん集まってきた♪

さすが、林の近くにあっただけあって質のいいのが集まってるな
精霊石あるじゃん。

「疾斗・・・アレ」

そういつて彩芽が指差したのは、『賢者の石』・・・

賢者の石は、錬金秘薬エリクシールの原料となる物質でかなり希少で売れば7000年は遊んで暮らせる額になる。

「おいおい、賢者の石って・・・」

「これすごい発見だよね」

とりあえず、魔霊石と賢者の石を丁重に運びながら鳥越家へと轉移した。

後日、エリクシールが売れたとか・・・真偽のほどは定かではないが・・・

分岐点（前書き）

結構読んでくれる人が多いので作者としては嬉しい限りですね♪

分岐点

フフフ、フハハ

今日は、待ちに待ったスウェリア魔術学院高等部入学式

俺はこの日をどんなに、待ち望んだことか

夢はやっぱ実現すると感動もまたでかいよな

そんなわけで、俺は下宿人4人と下宿所の娘1人
計五人で魔術学院へと歩いていった。

おっ♪クラス分けでてる
見に行っちゃうゾ♪

何々、5クラスあるのか
俺は、と1年5組らしい

同じ五組は、エスクと彩芽だ
4組にフェイヘル・アルフェルタさん

おゝこりや楽しそうだな。グッジョブ

「いこっ、疾斗」

「ああ、エスクも行こーぜ」

「騒ぐな、ガキ」

そんな悪態も気にならない。なぜなら入学式だから！

「〜であるからしまして〜皆で〜以上を持って入学式を終了いたします」

お偉いさんらしい人の話が長かったけど気にならない。なぜなら・

・以下略

「あたしがこのクラスを受け持つ　バクマ・デラフェルド・フェード。フェードと呼べ」

何だ？この人は

いかにも低血圧というか、だるさを体で表してるというか
メガネにくたびれた白衣姿でだらけられても・・・

「ん〜じゃ勝手に自己紹介しろ」

だらけた自己紹介が始まった。

お、彩芽の番だ。

「鳥越^{とりこし}ローラン・ローウェルン・彩芽^{あやめ}です。よろしくお願いします」
うむ、無難でよろしい。

ん？俺の後ろで何か話してる

「・・・サキュバスだぜあいつ・・・」

「・・・ちよっと、懲らしめてやりましょうよ・・・」

不快だったのでそこから聞くのをやめた。

俺の番だ。

「黒羽^{クロバネ}根・・・危ねえ！」

誰かが完成させた呪文^{スベル}彩芽に放ちやがった。

魔力の開放具合^{スベル}からして攻撃呪文

とっさに俺は、彩芽の前に立った

「ガッ・・・」

俺の身体にナイフが突き刺さった。

一本じゃねえな。だが今日は入学式なので・・・気にならねえ訳ねえだろ

回復呪文^{スベル}魔術で直す。
身体はOK

「お前ら、何しようとした？」

隣にいたやつが答えた。だが、それは俺の質問の答えにはなっちゃいなかった。

「お前、このジラル・カッサンドラ・レマニエッタ様になんて事を・
・言いなおせ！」

駄目だ。魔力を抑えなきゃ

「お前、邪魔するな。狩りの邪魔だ」

「ふざけんな。彩芽を傷つけかけておいて何言ってやがる」

「お前、カッサンドラ様に土下座して誤れこの方はかの有名な・
・」

「そうだ。さらにジラル家は騎士^{シュヴァリエ}クラスの悪魔と契約しておる」

ジラル家って事は、コイツ本人が契約したわけじゃねえのか

悪魔と契約するとその悪魔をどこでも契約することができる。
俺は個人的に13人の魔族とその他上位の者と契約している。
が、血のつながった者が契約した悪魔も召喚できなくはない。
ただし、それに見合う器と魔力が必要だ。
器がないと悪魔がこないし魔力がないと悪魔が帰ってしまう。
より強い悪魔と契約した者が強いと言えなくもない。

「んじゃお前ら決闘しろ」

ずっと見ていたフェード先生が言葉を発した。
クラス中が盛り上がった。

「良からう。ただし学院の者の見学もありにしてもらうぞ」
シュヴァリエクラス契約者が何言ってやがる

「いいだろう。その勝負、受けた」

「つー訳で、外の闘技場行くぞお前ら。見学自由だ」
誰かが、呼んだらしく教師、学院の生徒ほぼ全てが来ていた。

「大変なことになりましたねーがんばってくださいよ」
フェイヘル、緊張感ねえぞ。

「疾斗、大丈夫なの？」
「当たり前だ。絶対潰す」

実は、この闘技場に来る前に親父と念信した。
内容はこうだ。

そっちにいる力ある魔族全員呼ばせてもらう。

「では、始め！！」

あいつは、早速悪魔召喚の呪文を唱えている。

俺は、始めに無詠唱で個人契約の悪魔13体を召喚

いずれも、伯爵、公爵クラス

あいつは詠唱に夢中で気づいてないけどな

つーか、なんか教師たちも青ざめてない？

さて、やるか

『太古に散らばりし魔族よ、13体の悪魔を導に我が召喚に応えよ』

『魔族大召喚』

空が黒くなった。

皆が何事かとよく目を凝らすと全て魔族だった。

ようやく詠唱が終わったあいつが目の前にいる13体の悪魔と頭上にいる無数の魔族を見て腰を抜かしている。
だが、まだ許さねえ

『魔族よ、私の身体を媒介に敵を打ち滅ぼし我に力を与えたまえ』

『魔族吸収』

グッ・・・やっぱきついな

俺は全ての魔族を身体に入れた。

さあ呪文使うか

んゝ『特大ブラックホール』でいいだろ

魔力を集めて・・・一応聞いておこう

「まだやるか？」

首をぶるぶる振る・・・なんつったっけなこいつ

魔族を解放『ブラックホール』消去

「帰るぞゝ」

「ここまで強いとは・・・正直驚きましたよ」

「まあ、あいつ弱かったしな」

「いえ、こちらの世界では、中級魔術師でしたよ」
世も末だな。

実は、俺が魔族を吸収したのには2つ意味があった。

魔族というのは1体1体膨大な魔力を持ってる

それを吸収したということは俺自身の魔力に加算される。

しかも魔力というのは、増えた分はなくなるらない。

だから、明日だったら今日のようなブラックホールを作ることができる。

今日は無理だが・・・

これを、魔力増量裏技といってる。

もっとも、あの魔族たちを受け入れる器がなければ無理だが・・・

鳥越家へと帰ってきた。

この前、拾ってきた魔霊石の加工をしていた。

疾斗は、主に装飾品などの類を作るのが好きだったし得意だった。

指輪やペンダントなどは店にあるものと比べてとてもなんら遜色がない

さらに、完成品に永久魔法をかける。

魔法が、ひとつのものにこめられてるので最大3つまでしかかけることが出来ないが

それ以上かけると魔法が相反^{コンフリクト}してしまうからだ。

今日は、5つまで作れた。

5つ目を作り終わった時にドアをトントンとたたく音がした。

「どうぞ、あいてますよ」

「失礼しまーす」

入ってきたのは 彩芽だった。

「彩芽？どうした？」

「ううん、お礼言っておこうと思って」

「ああ、別に・・・俺も・・・あいつむかついたし・・・」
どうも、照れるな。

「うわぁーこれ何？」

そういつて彩芽が手に取ったのは、俺の作ったリングだった。

「魔霊石からこんなの作れるんだ」

「それ今作ったやつ。こっちは実家で作ったやつ」

俺は、自分で作った装飾品を見せた。

「細かいな」

「気に入ったの貰ってっていいよ。こっちはまだ、呪文スベルかけてないけど」

「ホント？じゃあこれとこれ」

彩芽が指差したのは黒ベースに白い文字のデザインと白ベースの黒い文字のペアリングだった

「そう、3つまで呪文スベルをかけよう。何がいい？」

「そうだなあ、回復・攻撃呪文スベルの補助魔術と恋の呪文スベルかけて」

「了解、好きな人いるのか？」

指輪に魔術を込めながら聞いた。

「まあね、」

「どんな人？覚醒する日も近い？」

「んとね、最近知り合った人かな」

「ふーん、出来たよ」

二つのリングを渡す。

「ありがと。でもね黒いほうは、疾斗にあげる」

「えっと、どういうこと？」

「あのね、私が好きになったのって疾斗なんだ」

「・・・・・・・・・・」

えーと、ここでフェイヘルとかライムさんが飛び出してドッキリでしたーとか？

「・・・・・・・・マジで？」

「うん、マジで・・・・・・・・だけど？・・・・・・・・」

確かに、彩芽はきれいだと思う。

嫌になる要素は1つもないけど・・・・・・・・ことサキュバス夢魔にいたっては話は別

夢魔という種族は・・・・・・・・俺は、キラルと同じじゃねえか

相手が、サキュバス夢魔って事だけで俺は差別してる

「そう・・・か・・・うん」

「もし・・・良かったら、だけ・・・ど　キスして」

眼瞑った。

どうするどうする俺！？

しっかりしろ

お前に聞いてやる

どうだ、今日お前はなぜ彩芽を命がけで守ったんだ？

それとも何か？ただ下宿人と下宿先の娘の関係を保ちたいのか？

この子がこんなに一生懸命に思いを伝えたのに

ああ！？力はあるだろうが！なぜその力をこの子に使おうとしない？

どうなんだ、なぜ余りある力を少しでもこの子に使おうとしない！

自分を変えたくてここに来たのは誰だ？

お前に聞いてるんだぞ？黒羽根・オズワルド・疾斗^{ハヤト}！！
いいのか？このままで・・・

ふう、吹っ切れた。

俺は、ゆっくりと彩芽と唇を合わせた。

その瞬間、光が俺たちを包み込んだ
眼を開けると、彩芽の身体に羽と尻尾が付いていた・・・

「えへへ、うれしい・・・」
下からライムさんの「ご飯よ」という声で俺たちは下に下りて
いった。

分岐点（後書き）

なんか付き合うことになったらしいよ？
この2人

小休止

あのあと、彩芽が覚醒したことに皆驚いたが翌日にはすでに時の話題と化していた。

「いやいや、私はお似合いだと思うわよ。疾斗君の銀髪もカッコいいし」

「もお母さんってば・・・」

そういう彩芽の左薬指には白い指輪が光っていた。

俺はといえば、ひとつの分岐点を過ぎたことで安心していたし、またこれからのことについての不安要素をどうやって消去していくかとそれなりに頭を働かせていた。

確かに覚醒した夢魔に精は必要だが1週間のリミットがある。
サキュバス

・・・育ち盛りの子供みたいだな・・・

今から登校するわけなのだが他の3人は先に行ってしまった様だ。別に気を聞かせてくれなくてもいいと思うのだが

「行くぞ。彩芽」

そういう俺の指に黒いリングがはまっていた。

教室に入ろうとするとフェード先生に声かけられた。

「よおっ。天才魔術師君。朝からうらやましいですな」

「おはようございます。フェード先生」

「オッ♪覚醒してるって事は昨日ヤツたのか？」

教師とは思えぬこの発言

しかも、直球ストレートで聞くか？

「そうそう、お前にケンカ売ったやつと腰巾着学校辞めて引っ越したぞ」

半分は先生のせいだと思っけどな

朝のHR

「という訳で、隣のクラスのやつら二人貰ったぞ」

そういつて来たのがフェイヘルとアルフェルタさん
どこかの陰謀かね？

「それから今日魔力測定あるんでよろしくしく」
ここまで来ると怠慢も許せるレベルを超えるぞ

「どうも、同じクラスになっちゃいましたね」

「そだな、ここ担任頭のねじ揺るんでっけど」

欠陥教師の通達ミスだったが一応受ける

魔力石、精霊石、神霊石、賢者の石、何個分かで測定するらしい

「はい、次」

俺は、機械に思いつき魔力を注いでやった。

皆は秒単位で終わってのに俺だけ数分かかるな

「ちょ・・・ちよつと」

あん？

その瞬間

ドグォーーーーーン

あり？機械のほうが壊れた？

だから俺を機械で測ろうとするのが間違いなんだよ

一応診断書には賢者の石1050個分以上と書かれた。

放課後

「えー、こんなかで魔力測定器をぶっ壊したやつがいるので測定できなかったやつは来週やるからな。」

クラス中の視線が突き刺さる

「それから、明日なんか大会あるんでパートナー作って出る、だよ。」

この学校の行事が急なのかそれとも担任が緩んでんのか俺は後者だと思うぞ

さて、放課後

彩芽が行きたいという場所についていく

ここは、喫茶店

俺は、コーヒーを

彩芽は、不可解な色の飲み物を飲んでいた

「明日、出るか？」

「もちろん、賞品すごいらしいよ」

「賞品ねえ」

賞金よりもさしたる問題が・・・

「んでね、今日ちょっと貰っていいかな？」

「ん？何を？」

彩芽は周りを見回して恥ずかしそうに

「・・・精」

「ああ、なるほど」

「んじゃ、帰りますか」
俺等は会計をして店を出た。

魔術大会《前編》

翌日、魔術大会開催日

ちなみに、昨日の夜のことは口が裂けても言う気はない。

目の前に大金積まれても言う気はない。

絶対言わない。

そんなわけで、眠い中全校生徒が集まりお偉いさんがルールを説明していた。

面倒なので以下のようにまとめる

召喚系魔術や魔力増幅系の魔術具の使用を禁ずる、というものだった。

俺たちの出番はまだ先だ。

ふと、中心を見るとフェイヘルとアルフェルタさんが出ていた。

『大気に集まる精霊よ。我に力を与え敵を引き裂け』

『精霊剣』

ほう、フェイヘルは精霊魔術がお得意ですか・・・

一方アルフェルタさんは・・・

『大気に散らばる精霊よ汝が我に加護を与え守りたまえ』

『精霊盾』

レベル高いな。

二人とも精霊を使えるのか

「すごいね、二人とも・・・」

「そうだな、じゃあ俺たちはぶち抜くか」

俺等の相手は3年だった。

「お前ら強いみたいだがここは俺等に勝たせてもらうぜ」
なるほど、強力な火球が作れるみたいだ

「どっ、どうするの？疾斗」

「ああ、大丈夫」

火球が俺等を襲う

誰もが、やられたと思った瞬間火球が消し飛んだ。

無詠唱魔術だ。

無詠唱というのは魔術の本質を極め威力などを受け入れ初めて出来る。

だが、学生レベルでは無詠唱は超高等魔術に指定されている。

あの質量の火球を消し飛ばすのは高位魔術師でも無詠唱では不可能なはずだ。

それを、いとも簡単にやれるのは疾斗が長年受けてきた教育と才能のおかげだろう

「すみません。詠唱する気はないんですよ・・・」
指から糸状の魔力を作り出し先輩二人を拘束する。

これで疾斗・彩芽ペアの勝利は決まった。

その後も次々と勝ち進んでいく二人

唯一苦戦しそうだったエスクが大会に出場してないのが疾斗にとっては嬉しかった。

準決勝

疾斗・彩芽VSフェイヘル・アルフェルタ

「あなたと戦えるとうれしいですね」

「そうか？ さっやろうぜ？」

フェイヘルが詠唱し始めた

今攻撃しちゃってもいいんだけどそれじゃ主義に反するんだよね

『火を司りし精霊、サラマンダー。汝が我に説きかけその力を顕現させたまえ』

やばい、四大精霊、サラマンダーだ。

これは、無詠唱魔術じゃ抑えるのは難しいぞ

「彩芽、防御壁張って」

幸いフェイヘルは詠唱中、あと一分はかかると見た。

アルフェルタさんも簡単な防御壁を幾重に張ってる

ええい

『水を司りし精霊、ウィンディーネ。汝が我に説きかけその力を顕現させたまえ』

火ときたら水でしようよ。

インスタント呪文スベルだから20秒で終わる。

だが、簡単な分すぐに破られるだろう。

本命はこっちだ。

『海の悪魔にしてルシファアの側近リヴァイアサン。我らに降りかかりし火を打ち払い敵を捕らえたまえ・・・』

俺が唱えてる間に火が襲ってきた。

早速ウインディーネの水が潰された。

次の彩芽の防御壁が溶かされていった。

『異界の海より力を与えたまえ』

呪文^{スペル}完成

『打ち払いし水流』

あっという間にフェイヘルたちが飲み込まれていく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

死んじゃってない？

俺は急いで水を消した

「うおっ。大丈夫か？」

二人とも気絶してる・・・

うわーお、やりすぎだった？

「し、勝者、黒羽根&鳥越チーム!!」

高らかに引きつった顔で告げる教師

明らかにやりすぎたみたいだ。

急いで運ばれてく二人を見届ける

「ピンポンカンコーン！続きまして決勝戦なのですが、対戦相手がいなくなりましたので代理　として1年5組ライカーク・レネペオル・エスクさんが戦います」

うおおい、絶対なんか仕込んだんじゃね？

「尚、特別ルールといたしまして召喚可、黒羽根・オズワルド・疾斗君の一对一とさせていただきます」

んだそりゃ？

真祖相手に勝てんのか？

決勝戦

「がんばってね、疾斗」

そう励ましてくれるのは、嬉しいのだが勝てる気がしない・・・
リングにたつと、エスクがすでに待っていた。

「一度、お前とやってみたかったものでな・・・少々いじらせてもらった」

やっぱり・・・

「俺も真祖相手にどこまでやれるかわかりませんが本気でいきます」
「そこなくてはな・・・行くぞ!!」

『神と神の顕現たる僕の四天使たちよ。我を媒介にこの世にきたりて力を与えよ』

天使い？しかも四大天王呼ぶ気か？

しかし、吸血鬼の真祖が天使って・・・

じゃあ俺も、

『悪魔界の王であり我が友ルシファーよ6666億の悪魔の元帥たる貴公の力、今求む』

ルシファー、悪魔たちの王である。

だが、俺はルシファーとはちよくちよく遊んだりする仲だ。
悪魔界にも結構行ったりするんだぜ？

ゆえに呪文^{スぺル}は短くてすむ。

『サタン召喚』

煙に包まれる

煙が晴れたときそこに立っていたのは・・・

魔術大会《後編》

現れたのは食事中のルシファーと副官のアスモデウス、地獄の公爵アモン、大公爵バアル

食いしん坊ベヒモス、エリート悪魔ベリアル、地獄の宰相「ハエの王」ベルゼブブ

皆さんポカーンとしていらっしやる・・・
優雅に口を拭き

「やあ、我が友、疾斗。ご両親は元気かい？」

「・・・・・・・・・・（汗）」

「どうしたんだい？・・・ところでここはどこだい？」

ベルゼブブ、お前はこういう教育をした？

「閣下、天使がもうすぐここに來ます。疾斗様はその相手を我々に依頼したいのではないでしょうか？」

さすが、副官アスモデウス

「おお、そうか。ならば我らが力を貸そう」

その言葉とともに四大天使が召喚された

『天使軍総司令』ミカエル、『エデンの園』統括者ガブリエル、『

治癒者』ラファエル、

タルタロス
『冥府の統括者』ウリエル

「久しぶりだな、ルシファー。お前が墮天して以來だ」

「そういう君は、天使長で我が弟のミカエル君じゃないか」

ん。とりあえず悪魔と天使の争いは任せるとして俺はエスク倒しに専念する

『異界につどりし莫大なる力を我が右手に、精霊界につどりし莫大なる力を我が左手に』

『魔霊の宴』

思いつきり吹き飛ばす。

『魔霊の宴』は放出系魔術、多分たいていの防御壁はこれで潰せるはずだけど・・・

『力在りし者よ、主の元へと帰りたまえ。』

『神の反射鏡』

うわぁー、跳ね返ってきた。しかも詠唱みじけえな

魔力消去

「フハハ、今度はこっちから行くぞ」

『小さき蛇の王、かのものを汝が力で石へと変えたまえ』

『石化衝眼』

っマジかよ・・・

足が、石になっちまいやがった。

にしても、天使召喚から、石術まで幅広いな

治癒には時間がかかる。

なるべく魔力抵抗してるけど・・・20分ほどで下半身動かなくなるな

しょうがない。ルシファールたちも限界っぽいし

禁術を使うか

防御壁を幾重にも張り巡らせて・・・これくらい張っとけば親父ですら時間かかるはずだ

『深き闇の世界に偏在する公爵の力を御貸し願う。開け闇世界の門。魔界の獣よ我が魔力を糧としきたれ』

エスクの周りにのみ黒い空間を発生させる。

次にその空間の中を闇世界につなぎ魔界の獣たちに食わせる。

これ、使って生きてるやつ知らないんだけど・・・
もちろん死にそうになったらとくけど

『深き闇の世界に偏在する公爵の力を御貸し願う。開け闇世界の門。魔界の獣よ我が魔力を糧としきたれ』

あ!?

まさか、あいつも俺と同じ魔術を?

くっ・・・やられた

俺も黒い空間の中に入れられた。

どうしてあいつもこの禁術を・・・じゃなくて、今は問題の対処を
ちっ・・・石化が進んできやがった

『魔界の獣よ。もと在りしところに帰りたまえ』

獣はどうか出来たから食われる心配はなくなった。
が、問題はこの空間を戻すのが至難の業だ。
なんせ時空が変わっちまってるからな

『ひかりの在りし時空へと姿を変え我を戻したまえ・・・』
駄目だ・・・

戻らない

んじゃ、桃太郎よろしく切るか

『大気に散らばる魔力よ。我の手に集まり剣へと姿を変えよ』
よしよし、あとは桃のように切ってしまうばいい
出れぬなら、切ってしまうえ、異空間ってね

ブシューアアア

おっ♪時空の裂け目が出来た。
瞬時に異空とおさらばする

エスクは・・・ふふっ、まだ出られないでやんの

「どうだーエスクー参ったかー？」

俺はこの間に石化を解いておく

『我の鎖となりし呪縛から解き放て』

「っん、OK」

「こ、こ、このクソガキがっ！」

「女の子がはしたないこと言わないんでちゅよっ♪」

はっはっは、まっ、ざっとかんなもんなかな
やっぱ最強♪俺

「くそうっ！負けだあー。ここから出せえー」

「勝者、黒羽根・オズワルド・疾斗^{ハヤト}」
さっ出してやるか

エスクも俺と同じ方法で出してやった。

「だあーもう。今日は、血の一滴までしぼりつつってやるからな」
帰っていった。

ついでに天使たちも・・・

「疾斗、おめでとう」

「ありがとう、彩芽」

「うむ、良かったじゃないか、疾斗」

「お前らもありがとな。ルシファア」

おいおい、魔王に向かってタメ口？と会場の誰もが思った。

「何々、困った時はお互い様さ。また呼んでおくれよ」
ハッハッハと高らかな笑い声を残して帰っていった。

小休止2（前書き）

今日の分が消えてしまったので更新はまた明日

小休止2

あのあと、魔術大会の表彰式が行われ俺たちはメダルと賞状、賞品を貰った。

賞品は・・・正直、俺にとっては非常に嬉しいものだった。

手渡された箱の中には、千年ほど前に上位^{ハイ}エルフが作った剣だった。
古代具コレクターはのどから手が出るほど欲しがるやつだ。

しかも、刻印がされてる。ギルバーク・ドレル・マラグラーク
歴史上の人物じゃねえか。これが本物だったら間違いなくエリクス
ールに匹敵するね。

まっ、俺は売らないけどね。

一方、彩芽の箱には・・・本？

「なんだろこれ？・・・タロットとかの絵が描かれてるよ」
タロットの絵？まさか

「ちょっと、貸してくれ」

俺は彩芽から本を借りた。

コイツは・・・これは、タロット召喚^{サモンブック}の書だ。

コルト16世紀になくなっていたのに、なぜだ？

こんなもんポンと渡せるもんじゃねえぞ

確か、これ一冊で国が買えるんじゃないかったっけ？

俺は、本物かどうか確かめるため召喚することにした。

これは、大アルカナのつづりとなっていた。

タロットカード78枚のうち22枚を構成するものが大アルカナだ。
俺は最初のページ『愚者』をめくって唱えた。

『出でよ 愚者』

本から何かが飛び出した。

派手な衣装に身を包んだそいつは紛れもなく絵と同じやつだった。

「これは、これは。久しぶりに外に出られた」

本物だ・・・

『去れ 愚者』

「そんな」

「はい、扱い方に気をつけたほうがいいぞ」

俺は彩芽にタロット召喚^{サモンブック}の書を渡した。

「うん。そうする」

さて、と

「彩芽、今日どこか行かない？」

「うん？ 今から？」

「今から、だけど？」

「うん♪行く」

時間とスポットを熟考した末、遊園地に決定した・・・

小休止2（後書き）

次回、遊園地編

あまり期待しないでください

絶叫遊園地（前書き）

日常の中の1ページだと思っていただけば・・・

絶叫遊園地

転移魔術で二人は遊園地まで来た。

「さっ、参りましょうか？お姫様」

「行きましようかね？王子様」

二人は、手をつないで遊園地に入っていた。しかし、疾斗も彩芽も気づいていなかった。

二人を追う二つの影があることを・・・

「おおー、手をつないで入っていききましたよ！アルフェルタさん！」

「あのう、こういうのやっぱり良くないと思うんですよ」

「何を言ってるんです！？同居人として以上に僕は二人のキューピッドなんです」

何を言ってるか分からないフェイヘルの熱い？力説に押されるアルフェルタはそのままフェイヘルについていくこととなった。

「疾斗く何乗る？」

「絶叫系以外なら何でも」

疾斗は、絶叫が大の苦手であった。

昔、母が魔術に失敗して間違っただけで疾斗を時空の狭間に飛ばしてしまっただけである。

尚、疾斗はその後自力脱出するまでの2日間、超高速で時空をさまよっていた。

ゆえに、高速で移動するものが苦手であった。

「よし、ジェットコースターに乗ろ」

「話聞いてた？」

程なくして・・・

「うーん、俺死ぬの？まずいんじゃない？世界終わっちゃうよ？」

「疾斗、しっかり」

一方、

「ウハハハ、アルフェルタさんの腕の中で死ぬるなら本望ですう。
地獄も天国だ」

「しっかりしてください、フェイヘルさーん」

少し、回復した疾斗

「彩芽、次はもっと穏やかなものに乗ろ」

「うん♪絶叫系行こっ」

「・・・」

ひたすらそのあとを追う地獄から蘇ったキューピッドとキューピッド専属治癒者

振り回されて、気絶寸前の疾斗とスーパー元気な彩芽

「もう限界っぽい。俺生きてる？」

「うーん、多分生きてるよ」

「グフフ、グフフフフ。お花畑えきれえだなあ」

「フェイヘルさーん、渡っっちゃ駄目ですよお」

「疾斗、最後にアレ乗ろ？」

そういって、彩芽が指差したのはこの遊園地の名物巨大観覧車だった。

「いや、実は高いところもっ？」

彩芽が、手を取って観覧車に走っていった。

観覧車の中

「これ、頂上で止まるとかいいうべ々なオチはいやだよ？」

「まさか？んなのないって」

かなり大きい観覧車なので頂上まで行くのも時間がかかる
それまで、今日の大会なんかの話をしていた。

「あっ、もうすぐ頂上だよ♪」

「ふ、ふーん、高いな」

ガクン・・・ガクン・・・ガ・・・ク・・・ン
トマッタアアアアアア

「まずいって、死んじゃうって。あ、辞世の句、詠まなきや」

「いやいや、落ちないって、落ち着いて」

フェイヘル・アルフェルタペア

「これは、どうしたんでしょうかフェイヘルさん？」

「・・・・・・」

「フェイヘルさーん、気絶してるんですかあ？」

さてさて、疾斗・彩芽ペアはというと

「絶対駄目だって、落ちるよ？俺の勘が言ってる」

疾斗の勘にどれほどの信頼性があるのかは分からないのだがいまだ
にパニック中の疾斗であった。

「彩芽さあその余裕はどこから来るの？この世の終わりかも知んな

いんだよ？」

「いや、そんなことないから」

「絶対、太陽系の惑星吹っ飛ぶんだって」

「だぁぁーもおっ、．．．．ん」

彩芽が、マシンガンのように意味の分からないことを言い出す疾斗の口をふさいだ

「ん？．．．．ん」

ガクン．．．ガクン．．．ガクン

「あっ♪動き出した」

「もうっ、いいとこだったのに．．．」

「じゃあ、もう一回しよっか？」

「うんっ♪．．．ん．．．んっ．．．」

楽しかった時間はあっという間に終わった
が、皆様はお忘れではないだろうか？この男を．．．

「彩芽さーん・疾斗さーん．．．」

「あれ？アルフェルタさん？どうしてここに？」

「あのう、フェイヘルさんを．．．」

「フェイヘル？うわっ」

白目をむいて気絶していたフェイヘルらしきモノがあった．．．

「どうしたんです？コイツ．．．」

「そのー先ほどの観覧車の停止で気絶しちゃって」

「．．．．．」

「．．．．．」

沈黙の風が俺たちに吹いた．．．

「よ、良かったね。疾斗。仲間がいて」

「いやゝさすがに俺も気絶はしてないなあゝ」

こうして、3人はフェイヘルっぽい物体を抱えて楽しかった遊園地をあとにした・・・

後日、絶叫克服のために訪れた男の二人組が訪れたとか訪れなかったとか・・・

真偽のほどは定かではないが・・・

真実は永遠に謎である・・・

妖鬼奇の森に住みし者（前書き）

ちよつと読みにくいのは勘弁

明日から更新ペースダウンの可能性あり

妖鬼奇の森に住みし者

さて、俺たちは今、人間界の魔物の住処『妖鬼奇の森』の前に立っていた・・・

魔物・・・それは、言語を持たないもの

通常、悪魔や獣人などは人間に害を及ばないが中には人間に敵対し低級なものを従え住民を襲うものもいる。

そいつらを、確保・退治せよという命令を受けここにやってきた・・・

メンバーは、俺・彩芽・フエイヘル・アルフェルタの四人
例によってエスクは行方不明・・・

まず、フエイヘルはこの間の件で役に立たない事が発覚したので・・・

「待てえい！僕の名前にヘタレをつけてくれるな！！」

「えっ？何？心読めるようになったの？すごいじゃん」

「ちがーう！フエイヘルと書いてヘタレと読むなどいってるのだ！

！」

「うるさい！物語が進まないぞ！ヘタレはヘタレらしくしてなさい！！！」

全く、うるさいやつだ

「ほるあ、またあ！大体疾斗だってパニックだったって聞いたぞ」

「俺だって気絶まではしてないわ」

気絶したのは、ヘタレ一人

持って帰ったのは俺

「はいはい！ケンカしないの！これから超危険な森に入るんだから」

そうだった

人間界では危険度Bクラスの森に入るんだった。

まず学生レベルじゃ近寄ることも出来ない森なのだが・・・

回想

朝登校すると実践と実益を兼ねた訓練だとか言ってフェード先生が、任務別に人員を分け始めた。

「まあー、ルシファー召喚できるやつがいるんだから大丈夫だろう」
そういつて、多分一番危険度のあるこの任務を押し付けたのだと思う・・・

以上、回想終了

「よっしゃ、いくぞ！！」

いやー出るわ、出るわ

グールにガーゴイル、ワイト、ミノタウロスまさに魔物の宝庫

俺以外の3人はすでに魔力がレッドゾーンに行こうかといとこだ。
ん？・・・何だアレ

「おーい、なんか洞穴っぽいのあるぞ」

「えええー、もう無理いー」

「ん？あ、ごめん。ヤツベなんか俺も疲れてるみたい・・・」

「ああ、大丈夫。僕も疲れて変なのみえてきた」

「そう？実は私も・・・」

「み、みなさあーん、しっかりしてください」

俺たちの前には・・・リツパな成長したケロベロスが立ちほだかっていた

「無理だ・・・今から洞穴に入らにゃならんのにケロベロスは俺一人なら逃げられるが3人いる。」

しかも視界が悪い。

「こりゃ、戦わねばならんだろ？逃げられそうにねえーしな」
確かにケロベロス君、戦う準備OKっぽい

しょうがない

『猛り荒れし竜巻よ。わが身を守りし壁を作りたまえ』

『大嵐の加護』

「さて、この間に手を打たないとまずいぞ」

「といっても、疾斗以外魔力もう尽きたよ？」

「ちよっと、手だして」

俺は、3人の手を取って魔力を送る。

「わっ♪スゴイ」

っと、その前に

「どうする？ケロベロス君。もうすぐこれ消し飛ぶんだけど」

「どうするって・・・どうしょ？」

「こんな時こそ、魔族召喚じゃないのかい？」

「残念だが、交信できない・・・そうかつ」

俺は、浮かんだ。

この状況を打破できる可能性を知ってるものを

「彩芽、タロット召喚サモンブックの書出して」

俺は、いつも携帯して置くように言っておいた。
彩芽から、本を受け取ると

『出でよ 隠者』
ボッシュウン

「何かようかな？」

「ああ、ケロベロスに有効な手段を教えて欲しい」

隠者は、ケロベロス、ケロベロスというと

「ケロベロスは眠らせるのが効果的じゃ」

そこまで言うのと、俺は

『去れ 隠者』

隠者を戻した。

「聞いたとおりだ。眠らせるぞ」

『我に牙を向きし野獣に安らかな睡眠を与えよ』

『眠りの風塵』

唱えたたんバッターンと倒れた・・・

「さっ、入るぞ」

俺たちは、中へと入っていった・・・

が、すぐに洞穴のご主人様とご対面できた。要するにすぐそこが行き止まりだった。

奥に潜んでいたのは、魔獣の中でもトップレベルのやつだった

人食い怪物『マンティコア』

攻撃力的にはケロベロスと大差はないが先ほどの『眠りの風塵』などの低級呪文スベルが効かない上に武器の尻尾は再生が可能

だが・・・

「3人、強い防御壁作って」

俺の指示通りに幾重にも強い防御壁を作る3人
俺はその間詠唱に入る

『魔聖の神々に申し上げる。我が魔力に惹かれし力ある神々よ。魔力を糧に我を襲わんとする魔獣を消し去りたまえ』

もう、防御壁が破られそうだ。

「今だっ防御壁を解け！！」

『黒き世界からの生贄』

この呪文スベルは魔獣を本来在りし姿へと分解し魔界に送るものだ。

「終わりゝ帰るぞ」

「いや、いつ見てもすごい威力だな」

「当たり前だ。かなり魔力が消し飛んだがな」

こうして、俺たちは無事学院へと帰ることが出来た

これ以来、フエード先生はどの任務を任せるか検討中だとか・
・
・

閑話（前書き）

最近悩んだんですけど、皆さんはバトル系と恋愛系どっちを書いてほしいですか？

どっちをかこうかと迷い中

是非、連絡ください

閑話

翌日、鳥越家から出てきた俺とエスク以外の若者が今にもぶっ倒れそうになっている

「おいおい、元気だそーぜ！せっかくのいい天気なんだしさあ」
ほらほるあというも効果なし・・・

「どうしたんだ？このガキどもは」
あんたが来てくれりゃ俺も楽できたんですけどね

そんなこんなで学院に来たら

クラスの一人が

「おい、聞いてくれよ。昨日の任務でF級の魔物3体倒したんだぜ」

はて、F級？

確か、俺たちはB級の森に飛ばされたんでなかったっけ？
F級って魔物の名前とか付いてたっけ

「おっーす、お前ら死んでねえか？」

フェード先生ご登場

「先生！おかしくね？俺ら、ワイト、ミノタウロス、マンティコア、ケロベロスだぞ！」

「まあまあ、落ち着け。よかったじゃん無事で」

いやあー、王立国家魔術精鋭部隊でも倒せなかったのになあーと言った時にはやばくね？それって、と思ったね。

ん？なぜかって
マンティコアやケロベロスは確かにトップクラスだけどそれはあく
まで魔物レベル
もつと強くもつと反抗的なやつらはいるってのにこのレベルで王立
なんたらが倒せないんじゃこれからのこの国の行く末が不安になっ
た、というわけ

さてと、この国の防衛力についてはお偉いさんに任せるとして一学
生として勉学に励まねば
ま、知ってることの復習だけど・・・

「～であるからして、このように魔術の力が働くのを魔術の原理法
則の～」

1時間目の授業は魔術物理

先生は『生粋の探究者』ガルビリアイ先生

授業時間目一杯つかって将来なんの役に立つかわからぬ魔術物理の
基礎を語っていく

時々当たるから注意せねばならんけどな

「はい、ここを黒羽根くん答えなさい」

ぐふっ、えーと魔術物理の根本的基礎はと・・・

「はい、つまり魔術を行使する上で魔力からの分散エネルギーを現
実へと変換・転送を～」

ふう、なんとか
無難にまとめられたな。最近適当に知識をまとめられるようになって
たと思う・・・

2時間目・・・召喚学

実践系魔術を使う授業だ。

先生は『怖がり召喚師』ルーナ先生だ

「は、はい。では今から妖精を呼びますう。」

はあ、そんな調子じゃ妖精に食われちまうぞ？
ったく、もお見てらんない

「へっ？きやあああああ」

うわあ、言わんこっちゃないピクシー団体の到着ですか

クラス中がパニックだ・・・

ピクシーなんざ低級妖精なのに・・・

あーあ、すごい髪の毛の乱れ

しょうがないのでお助けしますか

『呼び出されし妖精たちよ、己^{おの}がいるべき場所へと還れ』

あっという間にピクシーの傷跡が色濃く残る教室へと変わった。

そこらじゅうピクシーの爪痕だらけだ・・・

顔から血を流してる人もいる

「わっわっ、皆さんすいませえーん」

この先生が、学校にいられるのはひとえに容姿のおかげなんだろうーナ
ルーナ先生のファンは結構多い・・・危ない空気を感じなくもないが

まあ、助け舟でも出してやるかね

『物質と時空をつかさどる精霊たちよ この空間を在りし姿へと取

り戻させたまえ』

再生術の一種

あっという間にピクシー騒動前の教室に戻った。

「すげえ、こんな魔術見たことねえ」

「どうやったらこんなことできた？」

はっはっは

もつと褒めてくれたまえ、と頭の中のみにとどめておきつつ

「怪我した奴はこっちにこい！治してやっから」

こうして、一躍ヒーローとなった俺は次の教室へと行くのであった・
・

閑話（後書き）

全く意味のない文章をだらだらと書いてしまったかものです。

分岐点前 疾斗・フェイヘル編

学院終了の放課後

俺たちは5人まとまって帰るべき家に帰っていた。

夕飯もいただきいつものように部屋で『鍊金』でアクセサリー作りに勤^{いそ}しんでいるとドアが叩かれた。

「はい、あいてますよ」

「僕だが・・・」

フェイヘルだった。

「どうした？」

妙に殊勝な顔をしてやってきたあいつの顔は真剣そのものだった。

「うむ・・・実は・・・その・・・なんだ」

「どうしたよ？なんか悩みごとか？」

「悩み事と言えばそうなのだが・・・イヤ・・・やっぱいい」

そう言ってドアから帰ろうとするフェイヘルを止めた。

「ちょっと待てよ。何か話したいことがあるんじゃないのか？」

「そう・・・なの・・・だが・・・」

「お前らしくねえな。それほどの悩みなのか？」

3分・・・いや、5分くらい悩んでいただろうか？

やがて意を決したように

「笑わないで聞いてくれるかい」
そう、切り出した

「あ、ああ。聴こう」

「例えば、例えばの話なんだが、男女の中で友情は成立するかい？」

「難しい・・・だろうな。俺からは『有る』とも『無い』とも言えない。だがな友情ということは少なからず好意は持ってるんだらう？」

「あ、ああ」

「だとするとだ。友人ということはいつかその人にも好きな人ができるだろう？」

「そう・・・だろうな」

「ということは友人なのだからそれをどうすることもできないだらう」

「やはりそう・・・なるだろうな」

「なんだよ？どうしたよ？」

「笑うなよ。笑ってくれるなよ？笑ったら絶交だからな？」

「笑うかよ。いいから言ってみろって」

フェイヘルは意を決したように・・・そしてはっきりと言った。

「実は・・・僕は・・・アルフェルタさんが・・・」

「好きなんだ！」

その、あまりにも真剣な答えに俺はしばらく茶化すこともしゃべることもしなかつた。

どのくらい経っただらう？

俺の方から喋った。

「良いんじゃないか？アルフェルタさんに言ってみろよ」

フェイヘルは俺から目をそらしながらこう言った。

「だが・・・彼女はエルフ。僕はウェアウルフだから・・・それにこのままでもいいような気がするんだ。」

「お前さ、本気でそう思ってるの？」

「でも仕方がないんだよ。それに彼女だって僕みたいな奴に・・・」

ダグッ！

俺の拳がフェイヘルの頬を殴っていた

「つつ！なにをっ・・・」

「お前の『好き』ってそんなもんか？お前の好きになったアルフェルタさんは種族で差別するような人か？」

「そ・・・それは」

「それでいいのか？お前は」

「でも、しょうがないじゃないか！僕は疾斗みたいに強くはないし」
「今度は言い訳か？逃げんじゃないやねえよ！」

「僕は・・・弱い人間なんだよ」

ふう、しょうがないな。

多少荒療治だがアレをするか

「お前の『強い』ってな何だ？」

「えっ？ それは・・・その・・・」

「『人』として強くできるのは自分だけなんだよ」
「・・・」

「言ったよな？お前 『疾斗みたいに強くない』 って」
「それは・・・言ったけど」

ククッ

ノッテくれたな？フエイヘル

「クハハハッ 望みどおり強くしてやるよ」
「ハ？・・・えーと、それはどういう意味で？」
「こういう意味さ」

ドラゴンブック
『龍の書』

「これ、やるよ」
「これは？」

「俺の使役する龍たち♪しっかり持ってるよ」

「さあ！行くぞ」
「どこへっ？」
「来りゃわかる」

『人界と魔界の狭間に在りしわが世界へと導きけ』

『異界への扉』

「ここは？」

「俺の作った世界。いいところだろ」

この世界には絶滅した魔獣も数多く現存している。
人の手が入れられてない世界
ある意味素晴らしい

「この世界の1年があっちの世界の1秒にも満たないぞ♪歳とらねえーし」

「どれだけすごい魔術師なんだ・・・君は」
「とりあえず、ここでいいか」

俺は『ドラゴンブック龍の書』の最下位ドラゴン『ワイバーン』を呼んだ。

「ほらよ、こいつ倒してみな」

「ド、ドドドラゴン?!無理に決まって・・・うあぎゃああ!」

うわぁー

あいつ、最近出してもらってないからか元気だなあ

「はっ疾斗おお!たす・・・うぐっ・・・助けてくりえ!」

「フェイヘル!呪文唱えなきゃ勝てねえぞ!」

「そん・・・なの無理に・・・決まって・・・ギャオウ!」

つと、俺がいたんじゃ本当の力は出せねえか

「じゃなく!フェイヘル!お前が、ドラゴン一体倒すごとに次のド

ラゴン出てくるようになってるからな」
「ノオオオ！い・・・行かないでくれええ」

俺は、その場を立ち去る・・・と見せかけて森に隠れてうかがう
本当に死んだら何にもなんねえからな

現実世界でどれくらいだろうか？
100日？もつと？
ようやく反撃できるか？というところまで来た。

「ゲホッ、これでどうだっ」

『大氣に集まる精霊よ。我に力を与え敵を引き裂け』

『精霊剣』

ほうほう

ワイバーンの爪と互角以上にイケるか
これはもうしばらく様子を見る必要があるな

それから50日後
長かった戦いにも終止符が打たれた。
ピリオド

「ハア・・・ハア・・・やつ・・・た・・・ぞ」
バタンッ

あーあ、倒れちったか
まあ、生身だしな。食事もろくにとってねえし

しょうがないな。ここらで休みを取るか

パチッ・・パチッ

焚き火の音があたりに響く

「疾^{ハヤ}・・斗^ト? どうして・・ここに?」

「おっ? やっとお目覚めか?」

「ううっ、僕は気を失ってたのか?」

「ああ、まあそんなことより食え。ろくなもん食ってねえだろ」

「当たり前だろ? ワイバーンと闘いながらなんて木の実とかしか」

とか言いながら俺がとってきた木の実や魚なんかをバクバク食べ始めた。

落ち着いてきたところで

「まずだ。お前の戦いをずっと見てきたがありや駄目だな。なっていない」

「グボッ、ドラゴン相手に・・・って君はずっと見てたあ?」

「当たり前だ。死なれちゃ困るからな。当然だろう」

「全く・・君ってやつは・・・」

「そこでだ。もっと強力な術を教えてやろう。もちろんこっからのドラゴンが強いってのもあるんだが・・」

「今まで闘ってきたドラゴンよりも強い・・・?」

「当たり前だ。ワイバーンなんてその本の中で一番弱いに決まってるだろう?」

フェイヘルから血の気が引いていく

「あと21匹も・・」

「ちなみに全龍使役しない限りここからは出さないからな」

「ど・・どのくらいかかるだろうか?」

「さあ？俺も正確にやわからんがアバウトに言うとなら1000～10000年くらいじゃね」

「そ、そんなに・・・気が遠くなる話だよ」

「ああ。だがお前はセンスあるしもっと短くなるかも知だぜ？」

「そう・・・祈るよ」

それから、実戦形式の修行が始まった・・・

分岐点前 彩芽・アルフェルタ編

学院の帰り・・・あたしは、好きな音楽を聴きながら今日の授業の復習をしていた。

「うーむ。今日もやたらと難しかったなあ。疾斗に訊こうかなあ」
そんなことを呟きながら魔術力学の問題に取り組んでいた。

そんなとき

ーコン・コン・コンー

「ん？・・・空いてるよー」

と言いながらも、こんな特徴あるドアの叩き方をするのは一人しかない

「し・・・失礼しますうー」

「フフ・・・いらっしゃい。アルフェルタさん」

アルフェルタは、おどおどした様子で入ってきた。

いや、いつもおどおどしてはいるけどこれほどまでに緊張しているアルフェルタは珍しいと思った。

「あっ・・・すみません・・・出直してきますね」

彩芽の机に勉強道具があったのを見たからだろう。アルフェルタは部屋から出ようとしていた

「ちよっ・・・ちよっと待って。あたしも全くわかんなかったからさ・・・」

引っ込み思案なアルフェルタを必死に止めようとする。

「い・・いえ、こちらこそ・・その・・なんというか」

（これは・・普通の会話から始めた方がよさそうね）

「あつ・・あのさ、アルフェルタさん。よかったら勉強教えてくれないかな？」

「ふえっ？ わ・・わたしでよかったら・・その、構いませんけど」

「わあつ、ありがとう。んでね、ここなんだけど」

「ああ、これは魔力充填においての・・・」

「ありがとう。おかげで今度の試験はいい点取れそうだよ」

「いえ、私でよければ・・」

「そ・れ・でっ、ホントは何か話したいことがあるんじゃないの？」

「えっ？ どうして・・・？」

とたんにアルフェルタの顔がドンドンと赤くなっていった。

「そりゃーその顔見ればわかるよ。フェイヘルのことかな？」

「はうううっ どうしてわかるんですかあ」

もはや、『どうしたらそうなるのだろうか？』というくらいアルフェルタの顔は、赤くなっていた

熟れたトマトを横に並べても負けないくらいだろう

「もおっ、分かりやすいなあ」

「彩芽さんって結構・・」

もう泣き目状態である

「フフッ、じゃあそろそろ本題に入りましょ。フェイヘルがどうしたの？」

「実は・・・」

アルフェルタの話の内容はこういうもだった。

朝の食事のときや学校にいる時など目を合わせれば今までは笑顔で返してくれていたものの最近目は合わせてもすぐにそらされるということだった。

そのほかにも最近のフェイヘルはどこかおかしいような気がするということだった。

（アルフェルタさんほんとに気づいてないのかな？）

覚醒サキュバスとなった彩芽はこっち方面に関してかなり鋭くなっていた。

「うーんとね、私から言わせてもらえばアルフェルタさんは今まで通りにしていればいいと思うの」

「そう・・・ですか」

そう言ってアルフェルタはうつむいた。

「あれえ？とても今まで通りにはできないって顔してるねえ。どうしてかなあ？」

「えっ？えっ？そんなこと・・・ない・・・ですよ」

「ズバリ！アルフェルタさんっフェイヘルのこと好きでしょっ！」

「ふへっ？あのっそのっええと」

「ああっもうっ可愛いなあっアルフェルタさんは。大丈夫二人ならきつといい結果が出るよ」

「・・・いい・・・結果・・・ですか？」

「そう。だからさ、今はフェイヘルのこと信じてみようよ。」

しばらく・・・いや、かなりの時間がたっただろう。

そして、アルフェルタの口からこんな言葉が紡がれた。

「私は・・・フェイヘルさんが好きです。だから、今は彼を信じて待ってみたいです・・・」

龍王の力

それからのフェイヘルは俺ですら感心させられるばかりだった。

なんたって、あと1000年にかかる踏んでいたのにわずか126年と9か月16日であと二体の龍まで・・・というところまで来ていた。

教えた呪文も996個
身体的にも問題ない。

が・・・

「フェイヘル！よくここまでこれたな。俺の教えることはもうないだろう。あと、二体だ」

「もっ、もうここまで・・・？本当かい？」

「ああ。だがな・・・今までの龍とは違うぞ。あとの二体は間違いなく強い」

そう言ったのだが、フェイヘルは自信満々といった様子で

「大丈夫！勝って見せるさつ」と笑顔で言った。

「じゃあ・・・行くぞ！！」

「ああっ！来いっ！」

「出でよ『龍王』！」

バオオオオオオン！！！！

「呼んだが？疾斗^{ハヤト}よ・・・」

「しゃ・・・喋った？」

「当たり前だろ？龍王！こいつにお前を従える力があるか試してくれ」

「いいのか？こいつは人間だろう？死ぬかも知れんぞ」
至極当然な質問・・・だが

「舐めんなよ？俺が育てたやつだぜ？死ぬかよ！」

「疾・・・斗・・・」

「ふっ、よかろう・・・行くぞ！！人間！！」

俺は即座に離れる

その瞬間・・・

ドガアアアアアアン！！！！！！

耳をつんざくような音が襲ってくる・・・

『龍の洗礼』

神話レベルの特技だ。

だが・・・やつが俺の想像通りに成長してるとしたら

ふっ、やはりな

『神々の加護』

上位防御魔法の中でも桁はずれの防御術だ。

同じ術でもあれほどの輝きを誇れるのはそういないだろう。

「今度はこっちの番だ！！！！竜王！！！！」

フェイヘルが詠唱に入る

俺の十八番呪文

『七賢者に申し上げる。古の契約と制約に基づき我に力を貸し与えたまえ』

魔力と大気の力を食らいて敵を燃やし尽くせ』

『死者への鎮魂歌』

ふむ・・・ちゃんと『神々の加護』を維持しながら上位攻撃魔術もできるようになってるな

上出来♪上出来♪

だが・・・本当の闘いはこれからだろう
そんなことを考えていると・・・

「グガガガガッオオオオオオオンンン!!!!!!!!!!!!!!」

あゝあ、やっぱりな

龍の逆鱗に触れちゃったか

たぶん龍王も正気を失っただろう

ドラゴン・ブレス

『龍の吐息』

かつて世界の4／1を焦土に変えたと言われる技だ。

俺も軽くシールドを張る。

大したことに『神々の加護』はまだ、けし飛んでいない。

これは・・・いけるか？

龍王は今ので魔力のほとんどを失ったはず・・・

ブレスを防いだら勝ったようなものだ

「こっれっでっ！どうだああああ！！！」

『異界につどりし莫大なる力を我が右手に、精霊界につどりし莫大

なる力を我が左手に』

『魔霊の宴』

ドッキャアアアアアアアアアンンン！！！！！！！！！

おおっ、龍王が吹き飛んでった。

これは・・・やったか？やったのか？

「グッ！！！！グガアアアアアアアア！！！！」

うおっ、今を食らっても？

『王の力を今ここに顕現せよ！我は混沌たる力汝に与えたもう！我の呼びかけにこたえよ！』

『愚凱の狂王』

龍王の体に光の柱ができた。
こうして龍王の姿が消えた。

勝ったのは良いけど・・・この世界もボロボロな気が・・・
まあいいか・・・いいのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9234e/>

銀髪の魔術師

2010年10月15日18時23分発行